

レンズを通して

連載

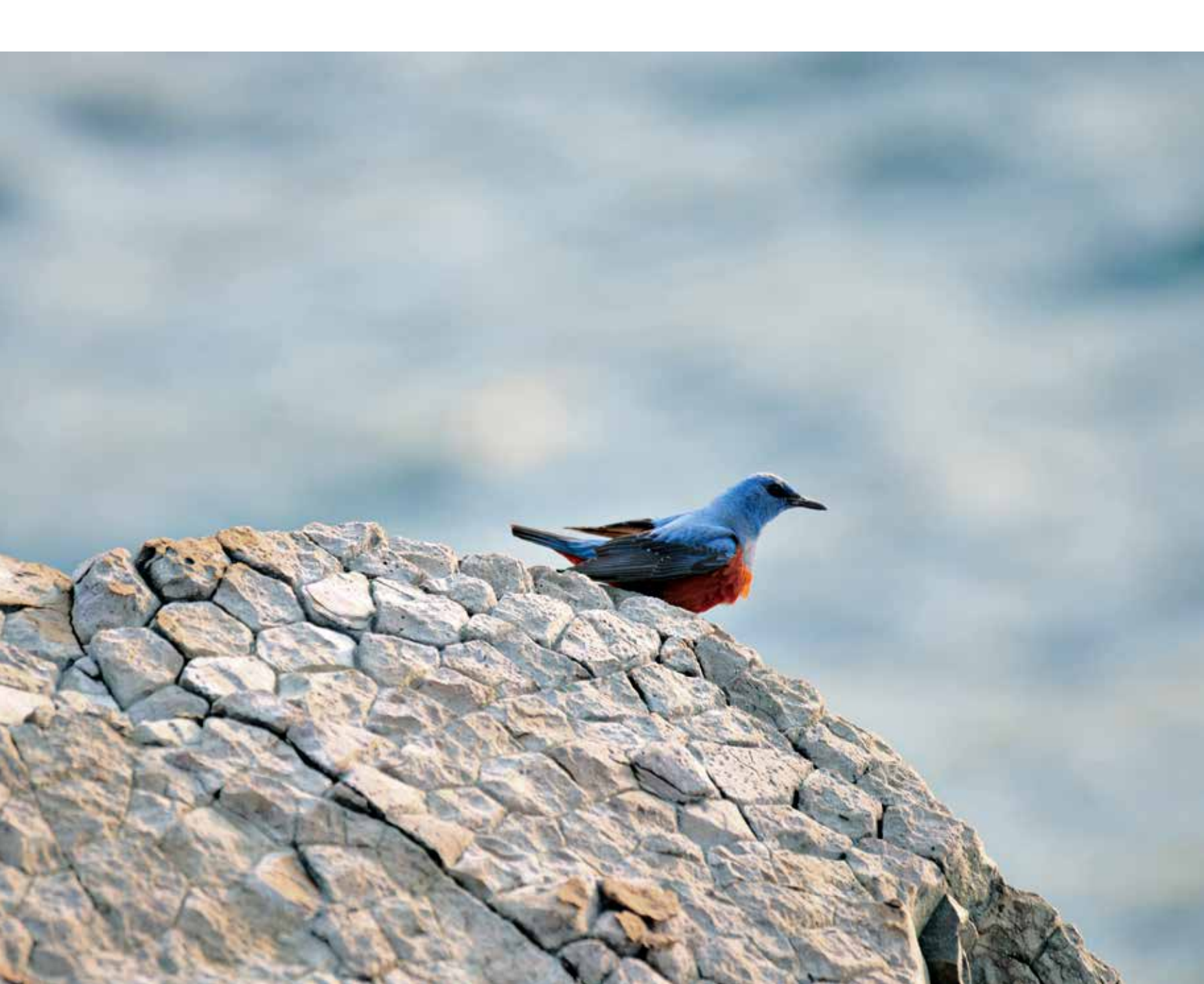
〔五月〕

写真・文 高円宮妃久子殿下



ヒヨドリ 27.5cm ヒヨドリ科

国内では市街地でもよく見る鳥だが、世界的に分布は狭く、日本、朝鮮半島とその周辺だけ。海外からのバードウォッチャーにとっては珍しい鳥。灰色のいがぐり頭と赤茶色の頬がなかなかおしゃれ。サトウカエデの赤い花をバックに。



鳥の名前

写真文 高円宮妃久子

名前は大切にしなければいけないと教わって育ちました。鳥類は世界中で共通して使われる学名とそれぞれの国で付けられた名前とを持っています。その国で見せる姿や行動の特徴を示す名前が付いているため、広く分布している場合には国によって名前が大きく異なることがあります。人間に付けられた名前を鳥がどのように思っているのかわかりませんが、若干紛らわしい鳥の命名について、三つの例を紹介させていただきます。

最初の写真は、にぎやかで、時として大胆さが嫌われるヒヨドリ。実はお洒落なルックスなのですが、キー、キーと甲高い声がうるさいのも確かです。次の写真はイソヒヨドリ。こちらはルックスも声も美しく、20年ほど前、同じヒヨドリの仲間でもずいぶん違うものだ、と思っ て凶鑑を見ていたら英名がBlue Rock-thrush。Thrushとはツグミのことです。面白い話として「ツグミなのに和名がヒヨドリ」とたくさんの方に説明してまわりました。ところが数年前、DNAを調べた学者たちによりイソヒヨドリはヒタキの仲間と判明。複雑すぎて、「面白い話」と笑っていられません。

次にコマツグミの話ですが、お見せできる写真がありませんでした。北米ではよく見る鳥なのですが、どうか撮った写真は巨大なミミズを啜えて、四苦八苦しているところ。畏れ入りますが、その姿をご覧になりたい方は「コマツグミ 画像」で検索してくださいませ。コマツグミは英名をAmerican Robinといい、直訳すると「アメリカコマドリ」となりますが、コマドリの仲間ではありません。実は16世紀にヨーロッパからアメリカに渡った開拓者たちが目にしたこの鳥に、自分たちの故



イソヒヨドリ 22.5cm ヒタキ科

ヨーロッパ南部からトルコ、中国をへて日本に至る地域で見られる。日本や大部分の地域で留鳥であるがインド、タイでは冬鳥。海岸の鳥なのに、最近では市街地でも繁殖するようになってる。右の写真は日御碕(ひのみさき)にて撮影。今から2〜3千万年以前に噴出した流紋岩が、幅5〜10センチの四角〜六角柱を束ねたような形状になっている。上の写真は隠岐島で撮影。岩の緑はダルマガク。



ヨーロッパコマドリ 13cm ヒタキ科

ヨーロッパからロシア東部に留鳥として分布。ロシアやスカンジナビア半島のは夏鳥。地中海に面したアフリカなどが越冬地となっている。数が多く庭の餌台にもよく来るので市民にも人気の鳥。写真はスウェーデンにて研究者たちが識別するための足環を付ける作業中に撮影。



アカヒゲ 14cm ヒタキ科

長崎県の男女群島、奄美大島、琉球諸島に留鳥として分布する。常緑広葉樹の茂みの中からヒンリリとよくとおる声で鳴いている。クリンと大きな目がとても愛らしい。人里にも多く、巣箱をかけるによく利用するらしい。写真は沖縄にて、ヒナたちに餌を運ぶ雄。

郷で見慣れていた同じく胸が橙赤色であるヨーロッパコマドリ European Robin にもなんで名前を付けたのです。現在でも単に「ロビン」と言えば、アメリカではコマドリのこと、ヨーロッパではヨーロッパコマドリのことを指します。

最後にアカヒゲとコマドリにまつわる、鳥の世界では有名な「鳥違い」の話です。アカヒゲの種小名は komadori、コマドリの種小名は akahige。これは18〜19世紀の著作『新編彩色鳥類図譜』において取り違えられて記載されてしまったことに起因します。長きにわたって入れ違いになったままであるのは、国際動物命名規約により「不適当な理由として後になってから破棄することとはできない」と定められているためです。学名の混乱を防ぐことがその理由なのですが、数年前、アカヒゲとコマドリは両方とも、属名が変わりました。Erythacus komadori → Erythacus akahige から Larvivora komadori と Larvivora akahige に変わったのです。内心、そこが変えられるのなら、どうしてその機会に全部を変えられないの? と思いました。

シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』に「名前前」というものにはどんな意義があるのか? バラは他の名前前で呼んでも、同じように甘く香る」という名台詞があります。鳥のルックスや声、習性が名前によって変わることはないでしょうし、魅力的でかわいい、と思いつけるのも確かです。

多くの鳥好きが海外からいらっしやり、共通する学名を思い出さなくてはならないのに、違う属名になっていることが多い昨今。覚えた名前が変わっていく事実に対応すべく頭を柔軟に保ち、それを「面白い話のタネ」と捉え、変わらないと言われながら変わる学名に置いて行かれぬように、注意していききたいと思えます。